

# 文理のジェンダーギャップを 問い直す

早稲田大学 教育・総合科学学術院  
濱中 淳子

# 自己紹介

1993.3 富山県立富山中部高等学校理数科卒業

1993. 4～ 東大理Ⅱ→教育学部→教育学研究科

2003. 2～ 東大教育学部でポスドク（COE）

2006. 4～ リクルートワークス研究所 研究員

2007.10～ 大学入試センター研究開発部助教

2012.10～ 同准教授

2016. 5～ 同教授

2017.4～ 東京大学高大接続研究開発センター教授

2019.4 ～ 早稲田大学教育・総合科学学術院教授

大学院教育

高校生の進路選択

社会人の学習

学歴の効用

高大接続・入試政策

教育費世論

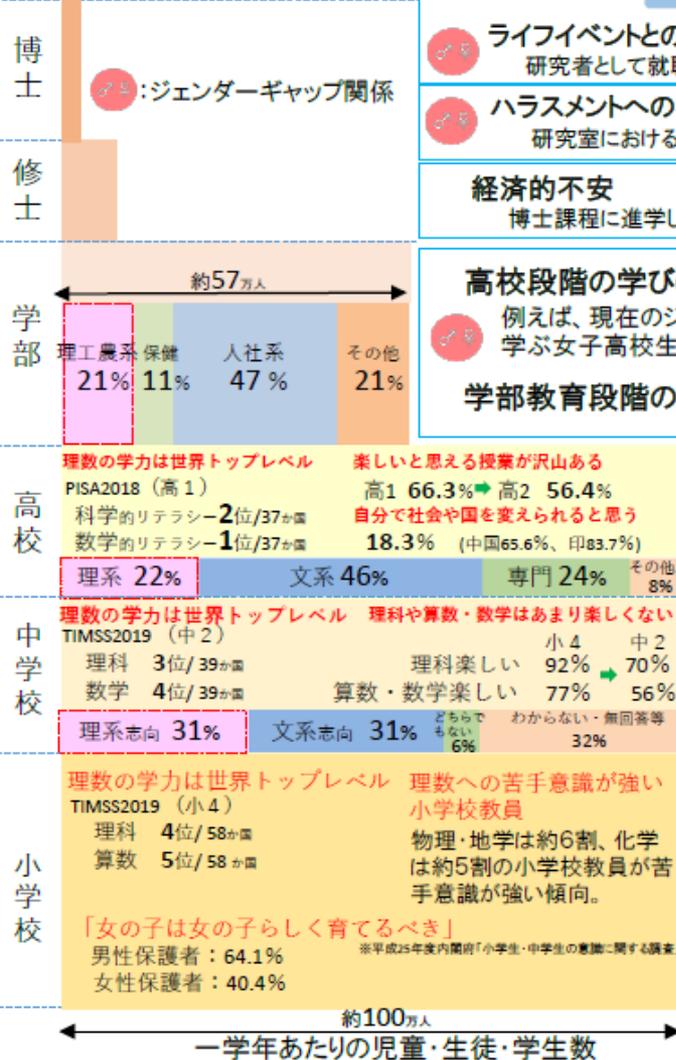
大学生の学習行動

# 【政策3】文理分断からの脱却・理数系の学びに関するジェンダーギャップの解消<目指すイメージ>

男女問わず、高校段階の理数は世界トップレベルであるにもかかわらず、子供の頃から「女子は理系には向いていない」など根拠のないバイアスが保護者・学校・社会からかかり、女子の理系への進路選択の可能性が狭められている状況について、出口となる大学側の学部や修士・博士課程の再編・拡充や職業観の変容などを同時並行で進めていき、ジェンダーギャップを解消し、子供の主体的な進路選択を実現する。どのような学びを選択するのかについては、バイアスがかからない状況下で個々の意思で判断できるようにすることが重要である。また、男女問わず、学校段階が上がるにつれ理数の楽しさが失われていく状況を解消し、早期の文理分断から脱却する。

## 現状・課題

## 目指す姿



- ⑫ ライフイベントとの両立のしづらさ  
研究者として就職した際のライフイベントに伴う研究中断やキャリアパスへの不安
- ⑪ ハラスメントへの不安  
研究室におけるハラスメントの事例とその不安
- ⑩ 経済的不安  
博士課程に進学しない理由のトップは「経済的な不安」
- ⑨ 高校段階の学びの変化に対応した学部段階の受け皿がない  
例えば、現在のジェンダーバイアスが解消され、高校段階で理数科目を中心に学ぶ女子高校生が増えたとしても、学部段階の受け皿がない
- ⑧ 学部教育段階の文理分断

- ⑦ 入試における探究力の多面的・総合的な評価
  - ⑥ 高校段階の早期の学習コース分けからの転換による文理分断からの脱却
  - ⑤ 高校普通科改革
  - ④ 産学双方からのロールモデルの発信・職業に関する情報不足の解消
  - ③ 理数の博士号取得者などの専門的な知見のある教師による教科本来の深い学びや実社会につながる学びや探究活動を展開
  - ② 専門性を持った教師が理数科目を担当
  - ① 保護者や学校、社会によるジェンダーバイアスの排除  
子供が主体的に進路選択できる環境、社会的ムーブメントの醸成
- ⑬ 女性が理系を選択しない要因の大規模調査

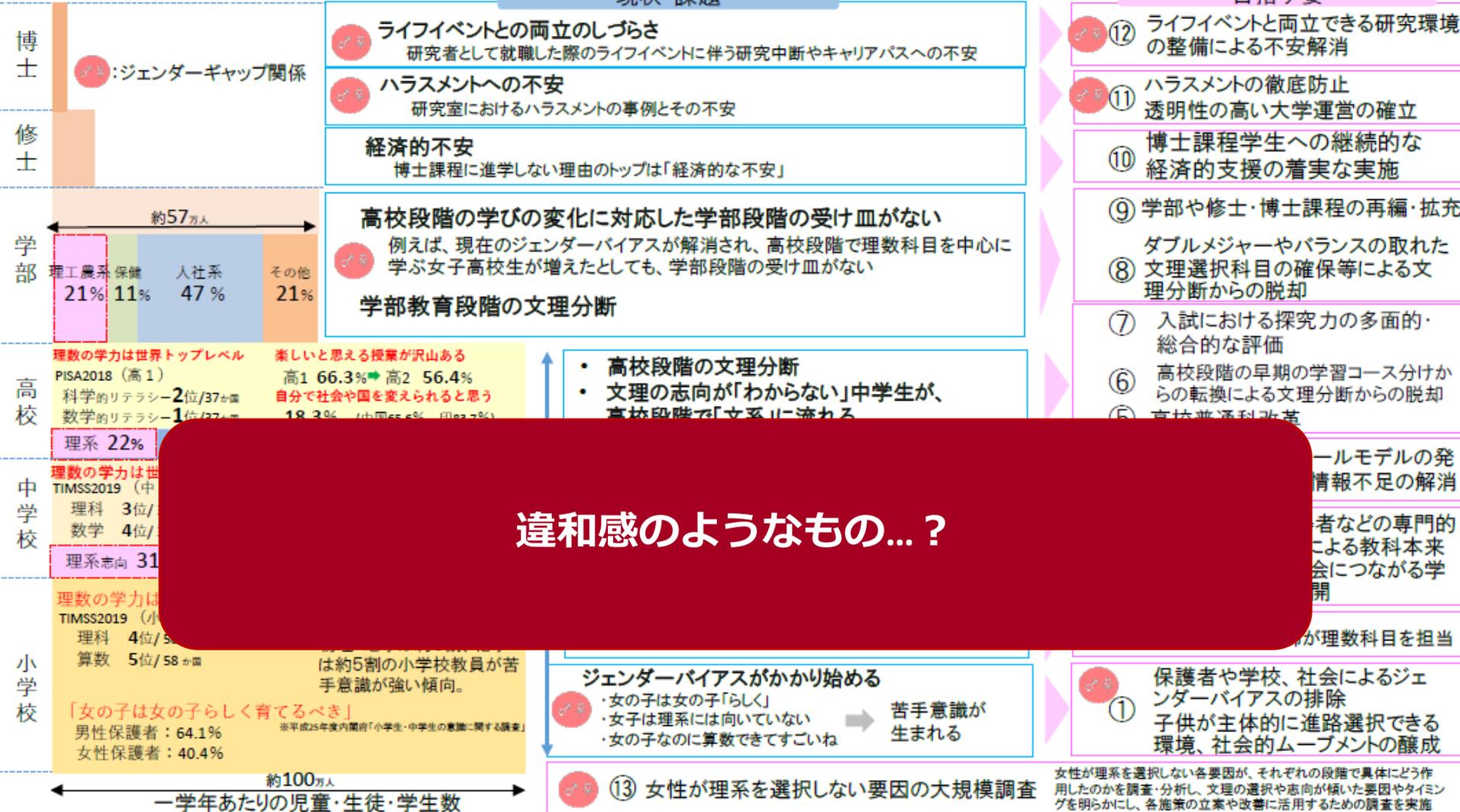
- ⑫ ライフイベントと両立できる研究環境の整備による不安解消
- ⑪ ハラスメントの徹底防止  
透明性の高い大学運営の確立
- ⑩ 博士課程学生への継続的な経済的支援の着実な実施
- ⑨ 学部や修士・博士課程の再編・拡充  
ダブルメジャーやバランスの取れた
- ⑧ 文理選択科目の確保等による文理分断からの脱却
- ⑦ 入試における探究力の多面的・総合的な評価
- ⑥ 高校段階の早期の学習コース分けからの転換による文理分断からの脱却
- ⑤ 高校普通科改革
- ④ 産学双方からのロールモデルの発信・職業に関する情報不足の解消
- ③ 理数の博士号取得者などの専門的な知見のある教師による教科本来の深い学びや実社会につながる学びや探究活動を展開
- ② 専門性を持った教師が理数科目を担当
- ① 保護者や学校、社会によるジェンダーバイアスの排除  
子供が主体的に進路選択できる環境、社会的ムーブメントの醸成

女性が理系を選択しない各要因が、それぞれの段階で具体的にどう作用したのかを調査・分析し、文理の選択や志向が傾いた要因やタイミングを明らかにし、各施策の立案や改善に活用するための調査を実施

男女問わず、高校段階の理数は世界トップレベルであるにもかかわらず、子供の頃から「女子は理系には向いていない」など根拠のないバイアスが保護者・学校・社会からかかり、女子の理系への進路選択の可能性が狭められている状況について、出口となる大学側の学部や修士・博士課程の再編・拡充や職業観の変容などを同時並行で進めていき、ジェンダーギャップを解消し、子供の主体的な進路選択を実現する。どのような学びを選択するのかについては、バイアスがかからない状況下で個々の意思で判断できるようにすることが重要である。また、男女問わず、学校段階が上がるにつれ理数の楽しさが失われていく状況を解消し、早期の文理分断から脱却する。

現状・課題

目指す姿



違和感のようなもの...?

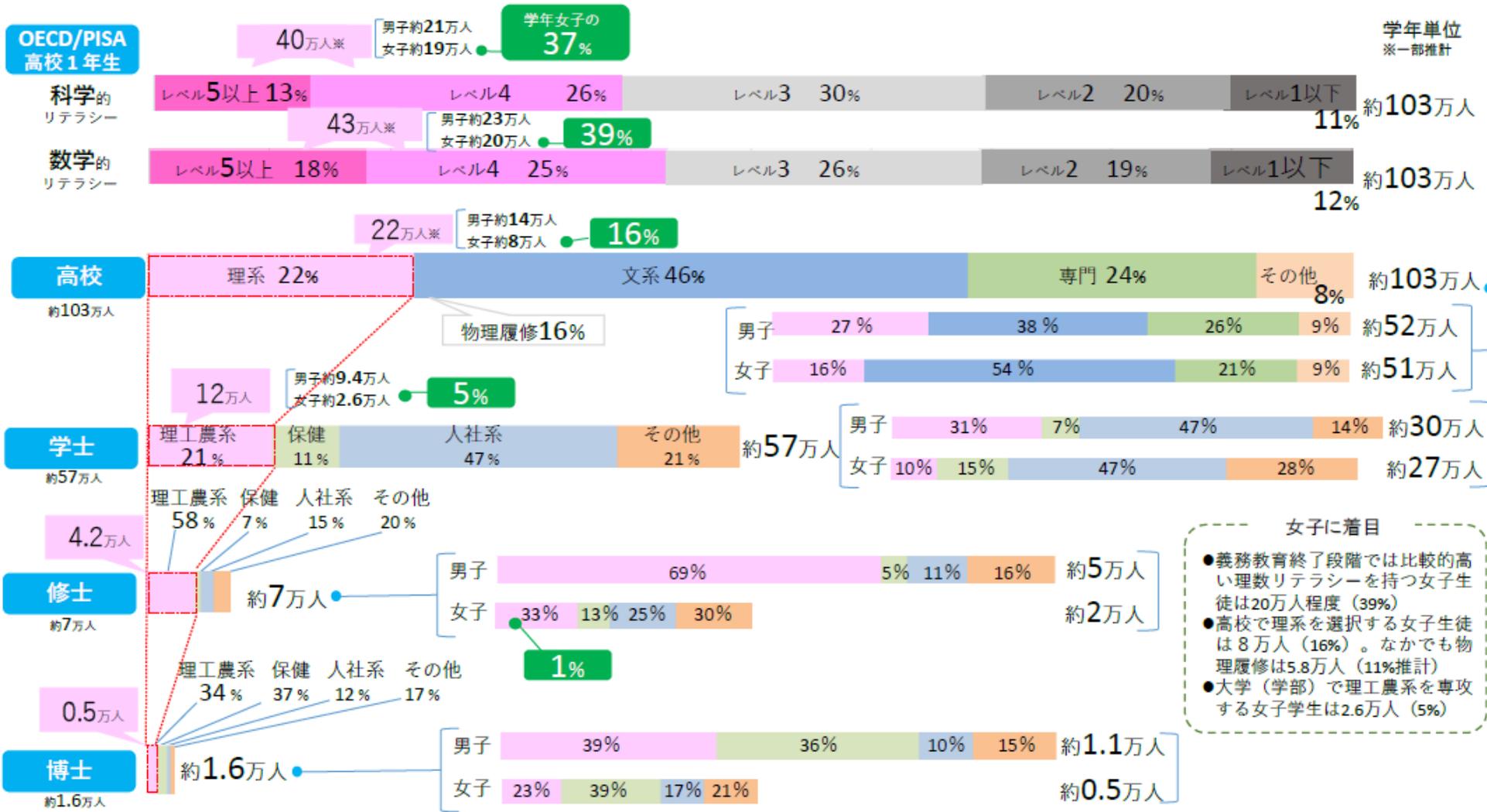


- ✓ 大学入試センター研究開発部時代に実施した調査。
- ✓ 2012年4月に高校に入学した生徒を対象にしたパネル調査。3年間で5回のアンケート+聞き取り。
- ✓ 首都圏公立進学校4校、中堅校6校。



**この調査でみえた高校生の姿を  
前提にしたときに気づく  
「リアリティのなさ」**

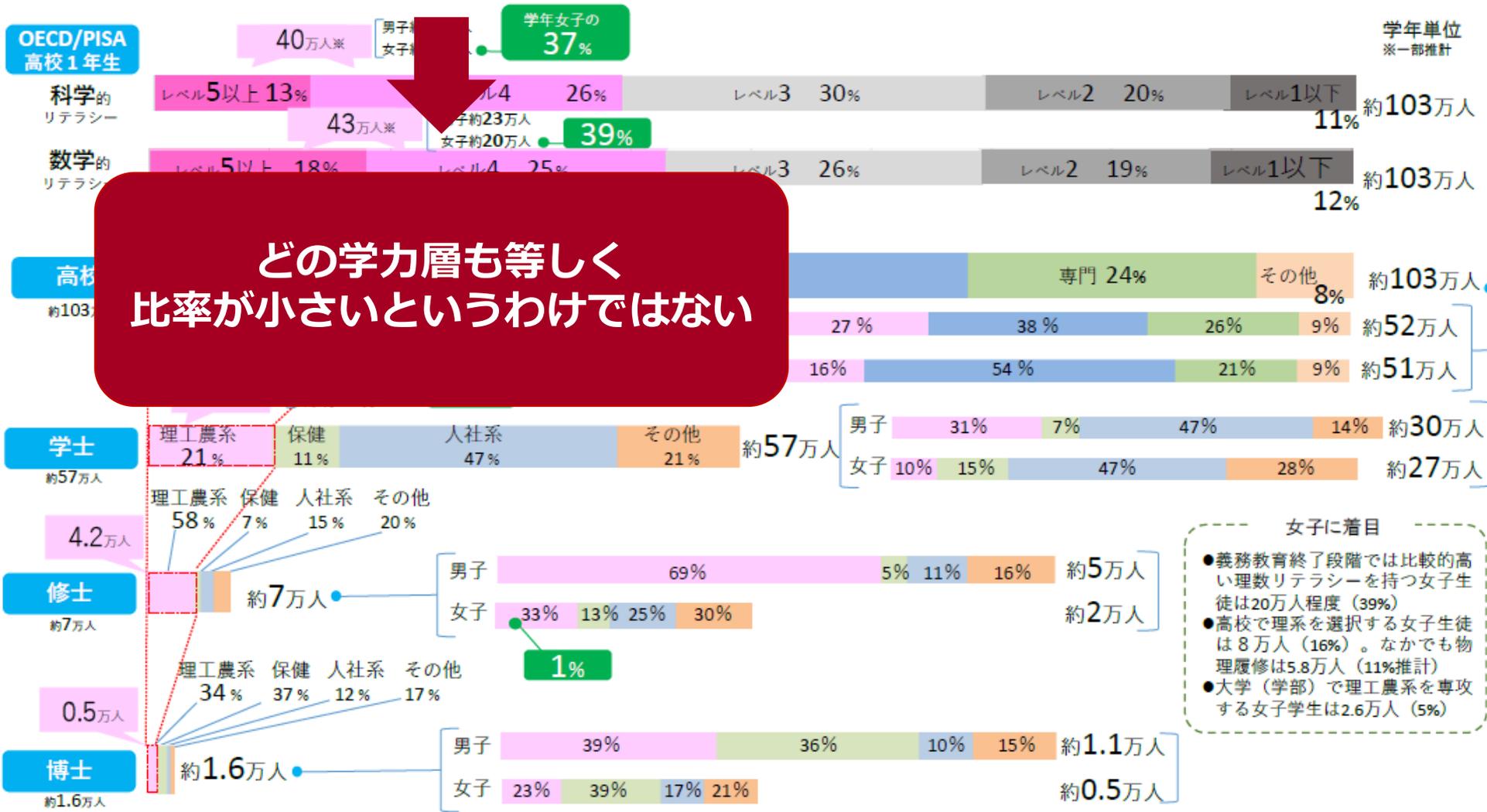
義務教育終了段階では、比較的高い理数リテラシーを持つ子供が約4割いるにもかかわらず、高校段階では、文理別のコースを選択するシステムも契機になり、理系が2割と半減。さらに、大学入学時には学生は入学定員とも関連して、理工農系学部の学生は約1割に半減し、修士・博士と先細っていく状況。特に、女子の理系離れは深刻であり、学士の理工農系進学は、女子全体のうち5%にすぎず、その結果、これらの分野で学ぶ男子学生は9.5万人に対し、女子学生は2.6万人と大きなアンバランスが生じている。



(出典) OECD/PISA高校1年生内訳: OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2018年調査に基づき作成。  
OECD/PISA高校1年生及び高校 総人数: 令和2年度 文部科学省学校基本調査より推計。

高校内訳: 国立教育政策研究所「中学校・高等学校における理系選択に関する研究最終報告書」(2013年3月)に基づき作成。  
学士・修士・博士内訳: 令和2年度 文部科学省学校基本調査に基づき作成。

義務教育終了段階では、比較的高い理数リテラシーを持つ子供が約4割いるにもかかわらず、高校段階では、文理別のコースを選択するシステムも契機になり、理系が2割と半減。さらに、大学入学時には学生は入学定員とも関連して、理工農系学部の学生は約1割に半減し、修士・博士と先細っていく状況。特に、女子の理系離れは深刻であり、学士の理工農系進学は、女子全体のうち5%にすぎず、その結果、これらの分野で学ぶ男子学生は9.5万人に対し、女子学生は2.6万人と大きなアンバランスが生じている。

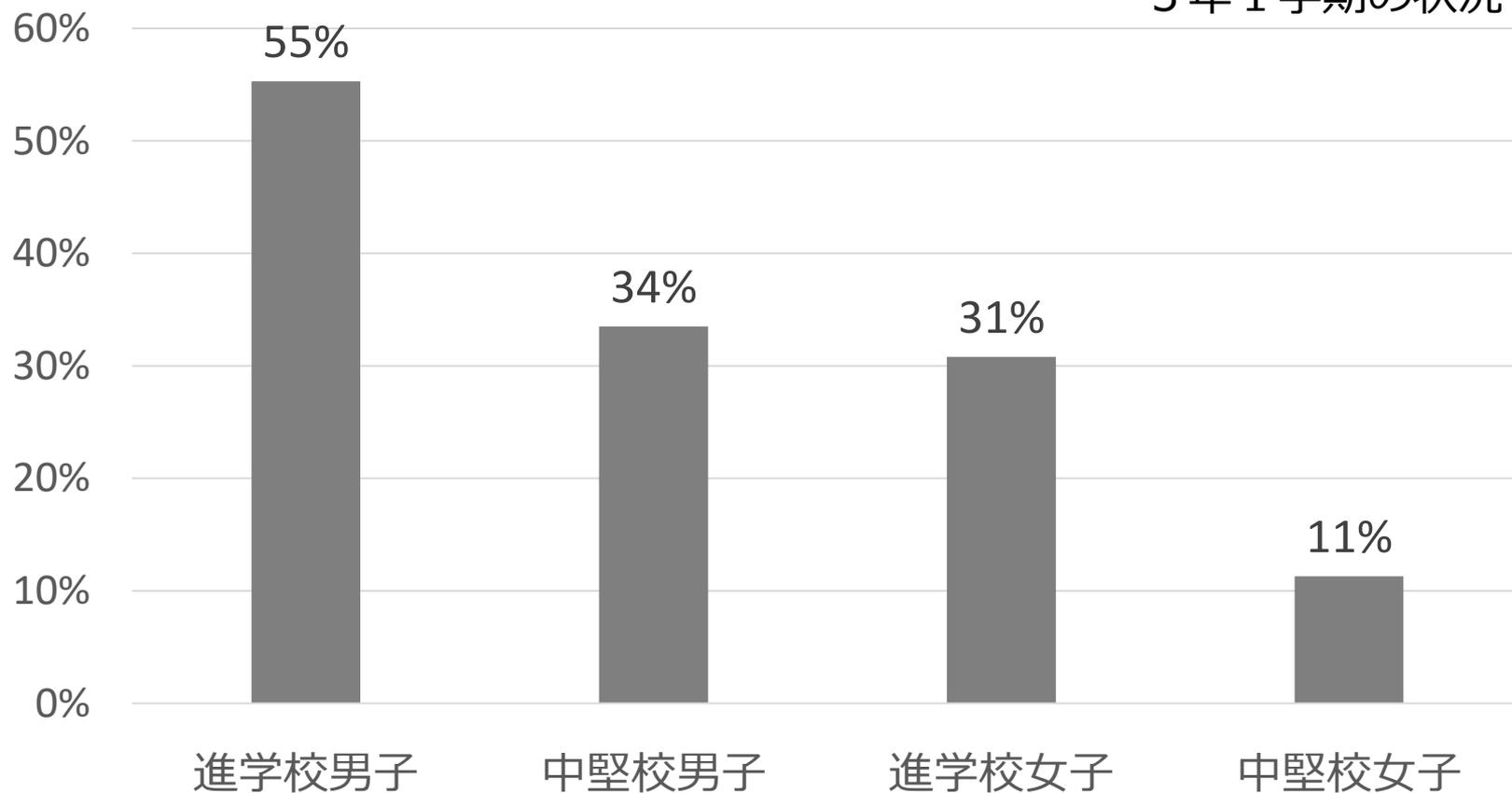


(出典) OECD/PISA高校1年生内訳：OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2018年調査に基づき作成。  
OECD/PISA高校1年生及び高校：総人数：令和2年度 文部科学省学校基本調査より推計。

高校内訳：国立教育政策研究所「中学校・高等学校における理系選択に関する研究最終報告書」(2013年3月)に基づき作成。  
学士・修士・博士内訳：令和2年度 文部科学省学校基本調査に基づき作成。

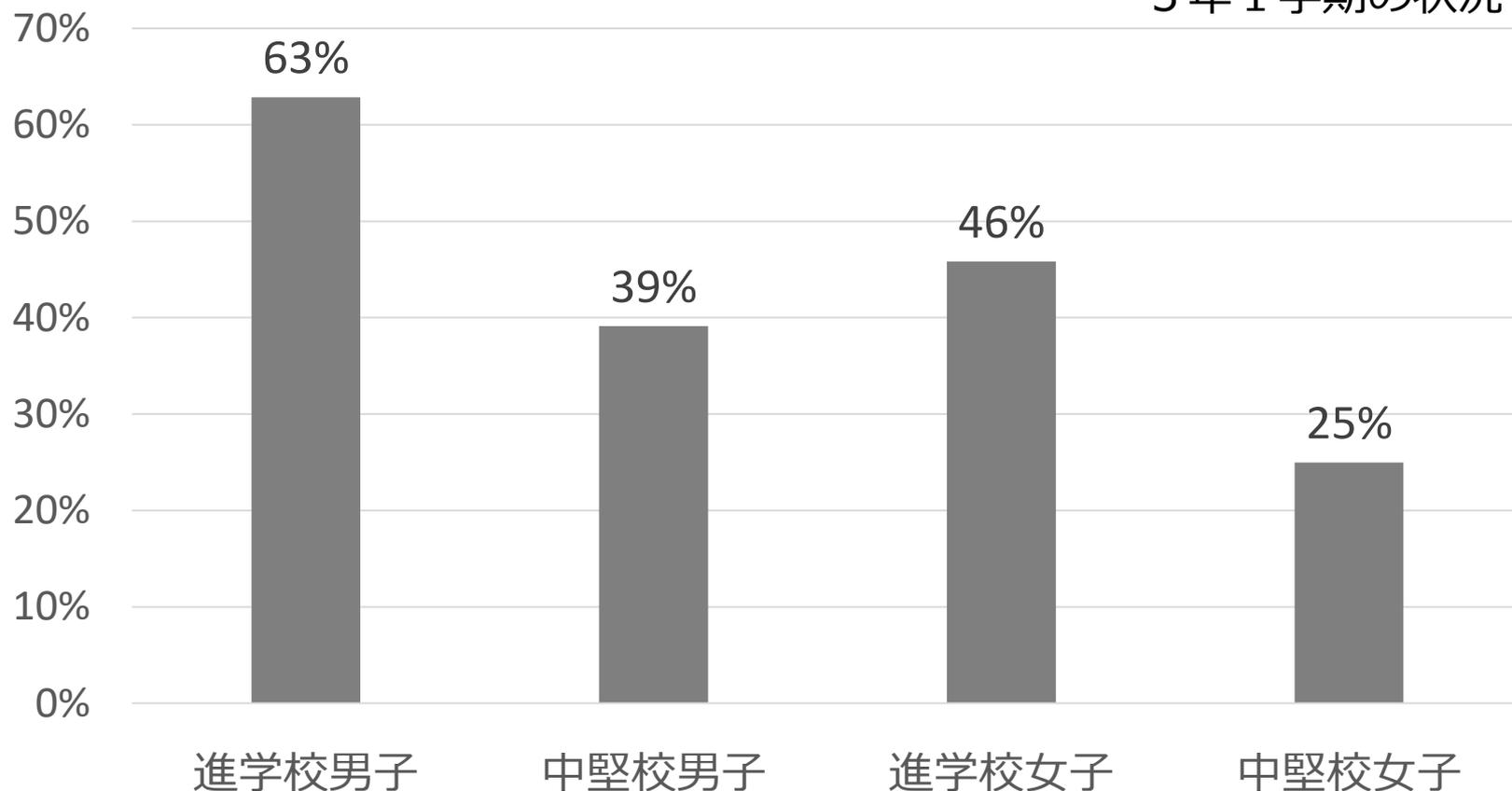
# 理工農系の進学を検討

3年1学期の状況



# 理工農系or医療系の進学を検討

3年1学期の状況



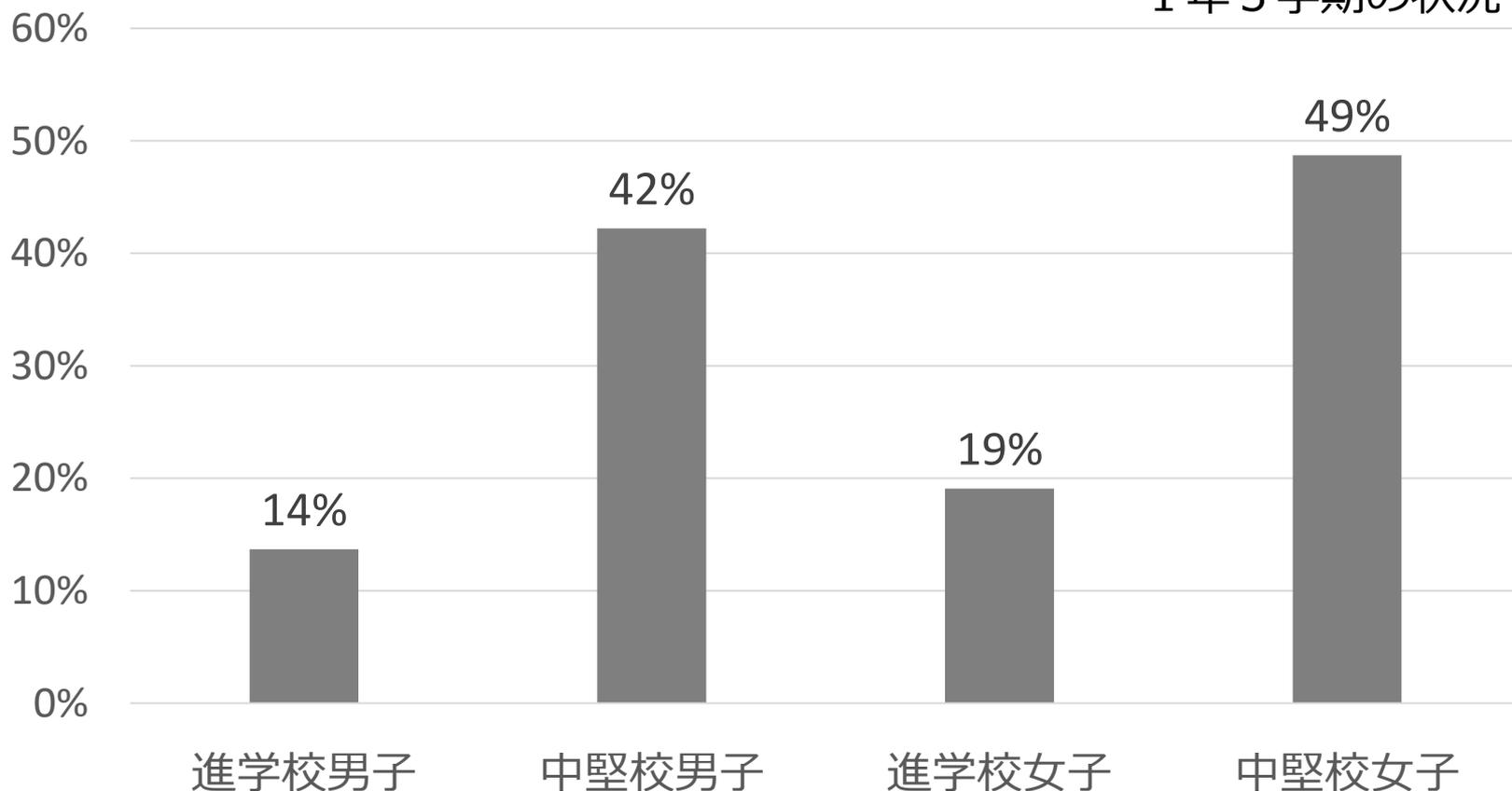
文理のジェンダーギャップ問題⇨中堅校女子問題

# データからみえた中堅校の特徴

1. 学習を誘引する要因の不在  
→定期考査、大学入試の影響力小
2. 未熟なタイムマネジメント力×部活動
3. チャレンジ精神？

受験に合格できそうでも、進学した後に勉強についていけなさそうな学校であれば、進学先として選ばない

1年3学期の状況

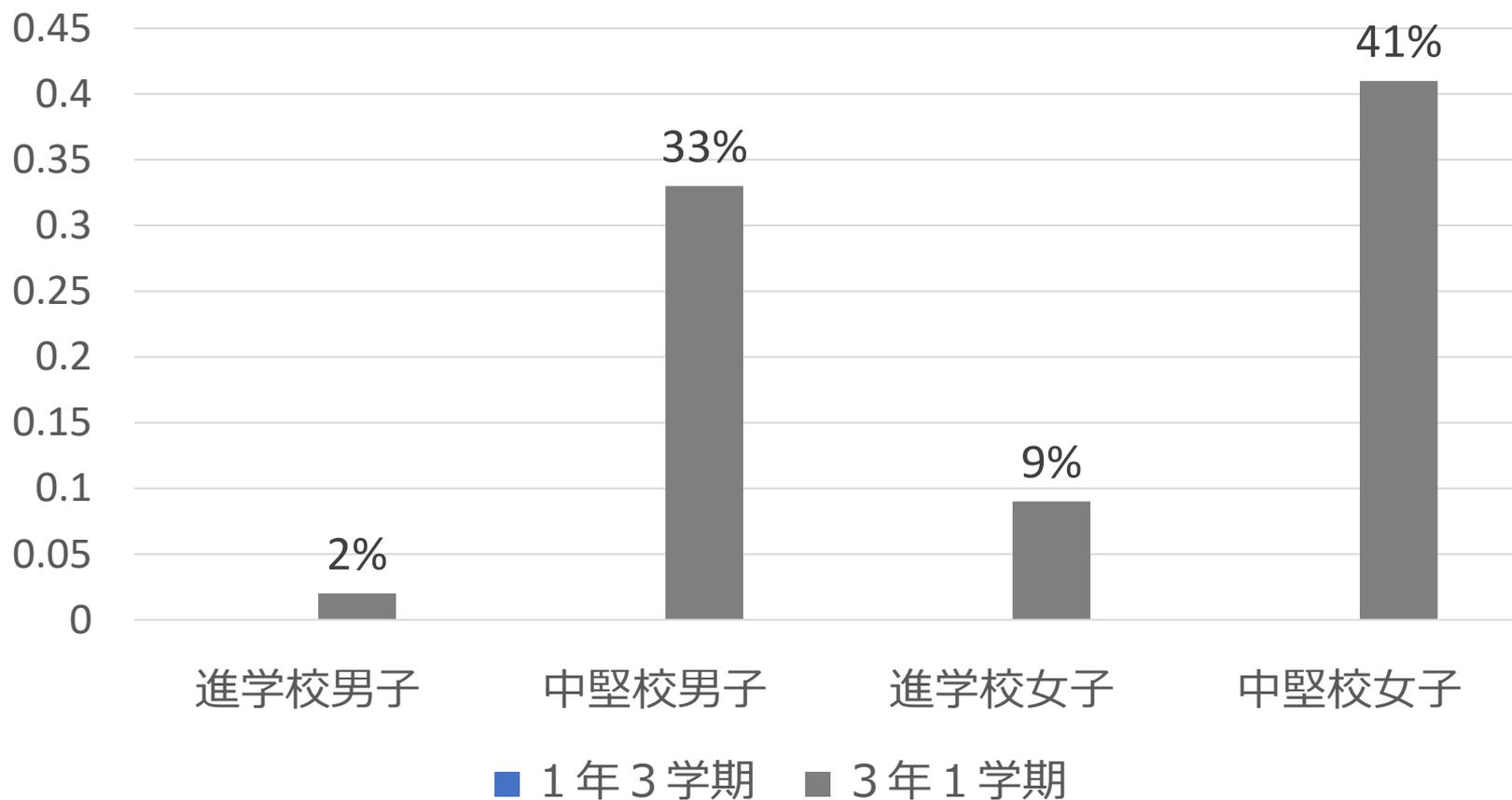


# データからみえた中堅校の特徴

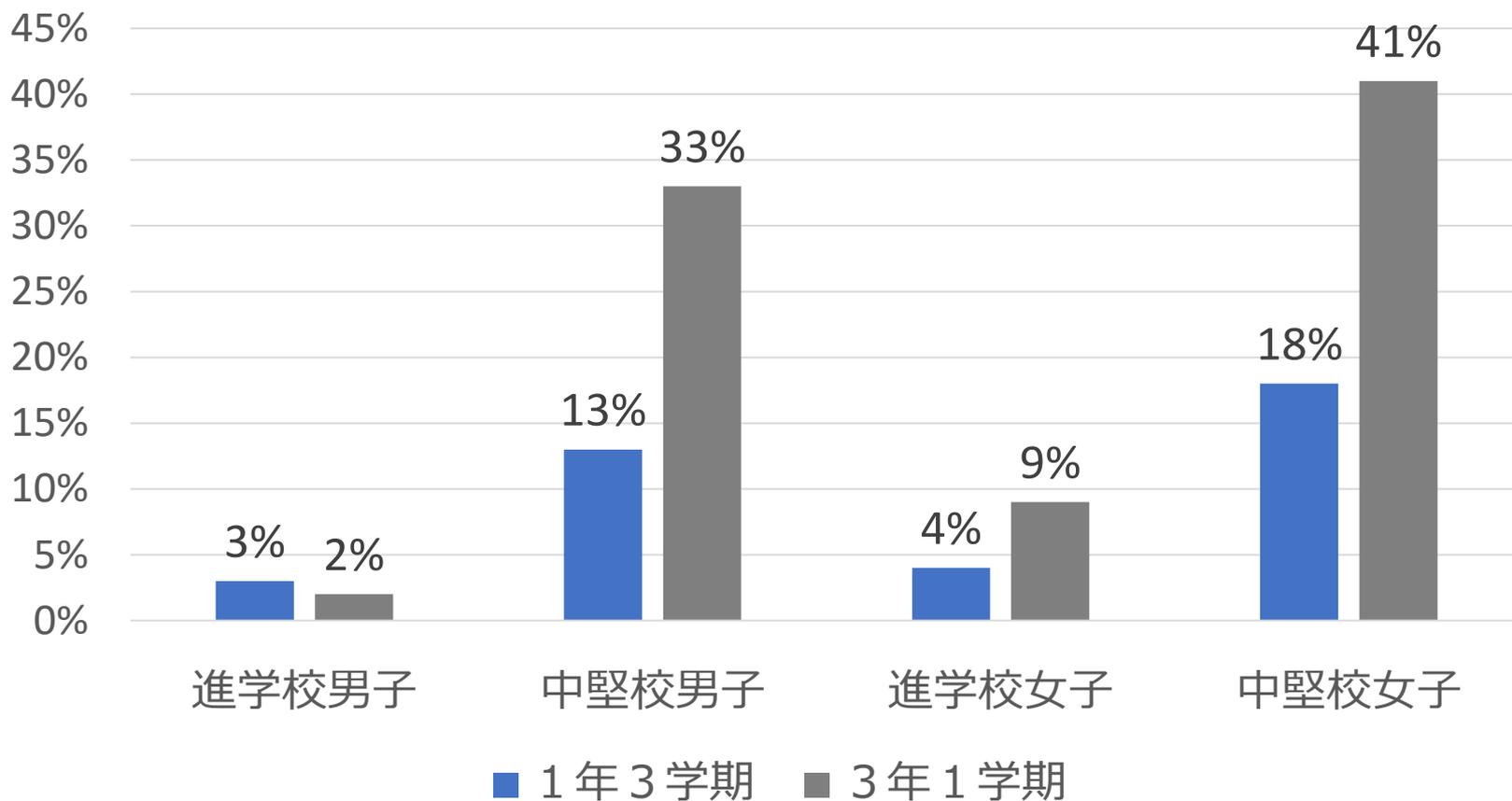
1. 学習を誘引する要因の不在  
→定期考査、大学入試の影響力小
2. 未熟なタイムマネジメント力×部活動
3. チャレンジ精神？

中堅校問題であるにもかかわらず  
「進学校的発想」で議論されていないか？

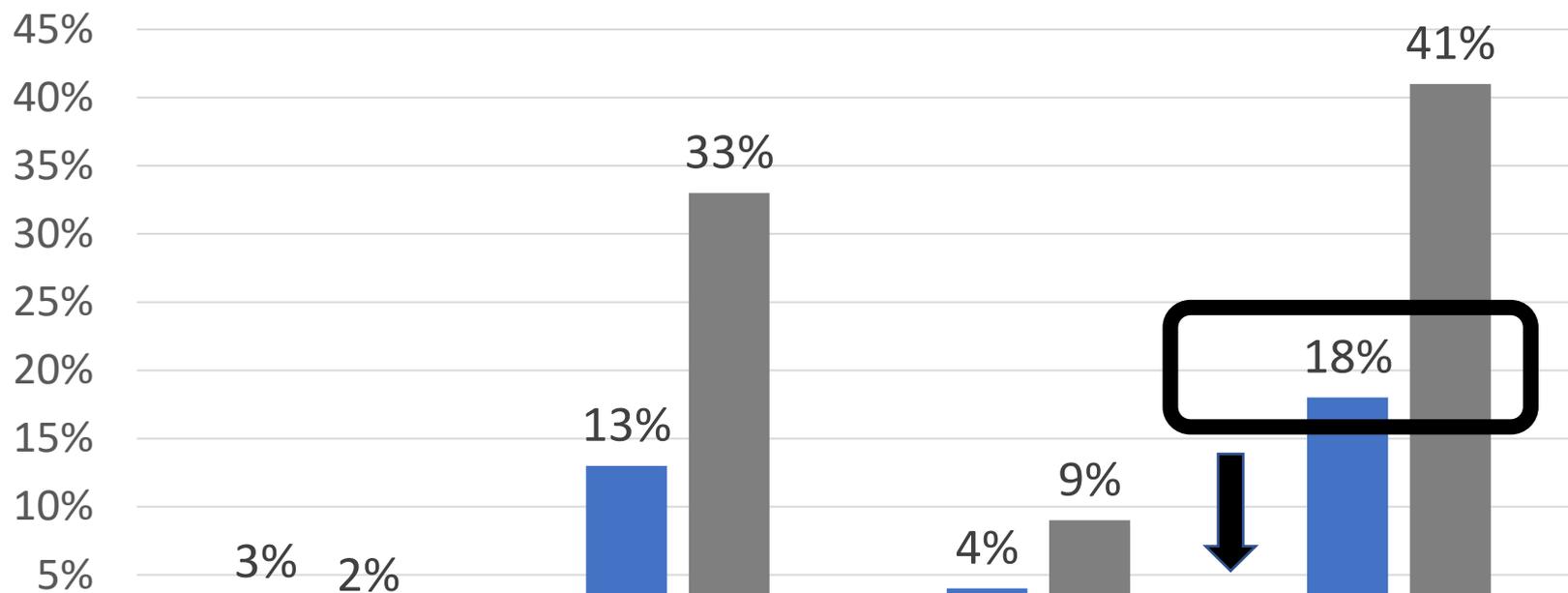
# 数学受験を避けた進路選択



# 数学受験を避けた進路選択



# 数学受験を避けた進路選択



この状況を活かしつつ、ジェンダーギャップ問題の解決を模索するという方向性も考えられるのではないか？

「ストレートなキャリアプラン前提」で議論されていないか？